
剣の記憶外伝 - 出会いは最悪 -

宇未 青乃屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の記憶外伝 - 出会いは最悪 -

【Nコード】

N7962Q

【作者名】

宇末 青乃屋

【あらすじ】

人類が起こした3回目の大きな戦争
世界が破滅する寸前に、賢者が全ての知恵を人々に与え、再び生き物が生きることができる世界へと導いた。
それが、この王国の初代王の物語さ。

そんな初代王が創設させた国に、初代王の意志を継ぐ若い者達の
ささいな日常生活物語。

外見に惑わされるなかれ

ユーロ王国。

それは、賢者の子孫が住まう国と言われている。

人類が犯した3回目の大きな戦争により、生き物が住めなくなるまで土地が汚染された。その土地を、この国の初代王が賢者の石の力を借りて、生き物が住める土地にした。そうやって、点々と旅をしていき、最後に辿り着いたのが、この広大な砂漠の真ん中である。その広大な不便な砂漠の真ん中に、彼らは住み着き、町を作り、町は次第に街になり、そして国へと発展して行ったのだ。

そんな歴史がある国だが、砂漠特有の問題も発生して国が傾いてきている。

それは 水の枯渇問題だ。

「水ー、水ー、水はいらないかい？」

法外な水が売られる街は、羅愛の絶好な仕事場だった。

「一杯くれ」

この街に不似合いな身なりのよい少年が、みずばらしい水売りに話しかけている。その現場を、羅愛は見逃さなかった。

（今時珍しい、どこかの貴族のボンボンかしら？ お金いっぱい持つてそう）

「まいど！ お兄さん一杯だけでいいの？」

法外すぎる水は、この地域の人間には手に出せない贅沢品で、こ

この住民は普段は家畜の乳を飲んでゐる。しかし、家畜を飼うのも水がある。そういう時は、雨水を溜めといて家畜に飲ませるが、その雨水が問題だ。

風向きによつては、大きな戦争によつてまだ汚れている大地の空気を吸つてきている雲の雨で、雨までが汚れているらしい。そのせいで、弱い者は病気になるやすい。

「はい、お兄さん
「どーも」

水売りは、少年に水が入った木の筒を渡す。受け取った少年は、財布を取り出すと財布からお金を取り出した。

（ふふふ、結構はいつているじゃないの）

最近治安も悪くなつてゐるために、身なりの良い者はめつたに立ち寄らないこの地域に、たいそうなお金を持っている、しかも羅愛と変わらない年齢の少年が、一人で出歩いているというのはとても珍しい。

世間知らずだろうか？　ちょっと見聞を広めたくて、様々なところへ出歩いている冒険家な少年ということだろうか？　とても危険すぎる。しかし、そういう輩がいるこそ、羅愛は生きていられる。

（世の中は、強いものが勝つ！）

羅愛は弱肉強食信者だ。

水売りと少年が分かれたところを見計らつて、羅愛はタイミングよく行動に移した。

「水ー、水ー、水はいらんかね？」

遠くに行つた水売りの声がする。

この行為にいたるのは、もう自然なことになってしまった。
そうしないと、子供は生きてられないから……。

（強くならないと、生きてられない）

音もなく、忍び寄るように少年に近づく。
そして

ドガッ

「きやつ……」
「うわ」

少年にぶつかる。半ば、体当たりをしかけるように

「やだ、アタシったら、考え事しながら歩いていたいみたい」
「大丈夫か？」

躓いたフリをして地面に伏した羅愛に、少年は手を差し伸べてきた。
た。

「ええ……、貴方こそ大丈夫？　ごめんなさい」

普段使わない声音と女らしい仕草で、自分は無力であると相手に認識させる。

そうやって、少年の方へと見上げると、羅愛は息が詰まった。

（うわ、美少年）

髪の毛が白に近い銀髪、陶器の白さを通り越して不健康そうな白さだが、肌がきめ細かそうだ。そして、丹精整った神の芸術品といえる顔立ち。誰がどうみても、美少年と讃えられる領域だ。もし、彼を讃えない人間は、芸術というものがわからないのであろう。

（見惚れている暇なんてないのよ、仕事仕事）

「俺は大丈夫だ」

口数少ない少年は答える。

「よかった、怪我が無さそうで。ごめんなさいね」

と一礼して、羅愛は急ぎ足で去ろうとした。

「お前、ちょっと待て」

（ぎくっ）

「何か、俺に返す物ないか？」

「何のことでしょう？ アタシ急いでいるから、貴方と遊んでいる暇はないの。じゃーね」

走る理由を述べて、羅愛は豹の如く走り去った。

羅愛はこの辺では一番に足が速いということ、巷では有名だ。
”瞬速の羅愛” 電光石火の羅愛” 足だけ速いやつ” など等、
そんな呼び名がつく程足が速い。

だが、それも井戸の中の蛙！

「俺の金返せよ」

「うわ、何コイツ！？ アタシのスピードついてきているし！」

羅愛の１メートルくらい後ろに、先ほどの少年が同じスピードで走ってきている。

（怖い、何コイツ？ 追われるって凄く怖い！）

人生初の追われる体験真つ最中の羅愛は、余裕をなくしていた。

「くそ、ここはアタシの庭同然よ！ ついてこれるかしら？」

もつともつとスピードをアップさせるため、足の筋肉に意識を集中させる。

だが、少年もスピードを上げて、羅愛を追いかける。

「何だ？ 単なるボンボンじゃなかったのか？ 何よ、何よ、これでも喰らえ！」

羅愛が腰にかけてあるポーチの中から、何かをこそこそ取り出して放り投げた瞬間。

ドカアーン

爆発音が響き渡った。

普通の人間なら、その爆発に巻き添えになって死亡。

現に、裏路地のどうでもいい建物が半壊状態になり、崩れかけている。

「凄い威力ね、爆弾作り趣味なタニ工作だけど、これは趣味を越えているわ」

「後で、そいつに合わせる。こんな危ないもの民間人が作り出すのは、国の法律ではご法度だ」

爆風をかき分けて、奴が出てくる。

（うわ、人間じゃない！ 絶対に今ので倒れているから）

羅愛は右に曲がり、建物の裏へと回って梯子を急いで上り屋根へと移る。上り終えた梯子は回収する。

「これで、これないわ」

この高さならば、梯子がなければ来られない。
来られないなら、羅愛の勝ちだ。

（しかし、この違和感は何？）

羅愛は自然とその場から走っていた。
油断は禁物である！ という言葉があり、今の羅愛はその言葉に従っていた。

ガツ、ガツ、ガツ……

（何か音がしない？）

もしかして

ふっと嫌な予感がしたが、それを考える暇があるのならば、少しでも遠くに行くのが賢明だという判断が身体でしていた。

「金、返せ」

羅愛が上って来た屋根部分から、指が見えた。

（げーっ！ 自力で！？）

相手が完全に登りきるまで、羅愛は隣の屋根へジャンプし、また近場の屋根へとジャンプする。

なるべく遠くへ！

もう、そのことしか考えられない。

「完璧に怒った。直に返せばいいものを、何が何でもお前を捕まえてやる」

（ああ、外見に惑わされては駄目だったな……）

今後の教訓にしよう。

病的すぎるようなひ弱な美少年という仮面の内側には、化け物がいたなんて！

外見に惑わされた後悔は、海よりも深く。

羅愛はこの鬼ごっこが、夜には終わっていることを心の底から祈った。

赤い炎の如く燃えている夕日が、地上から10分の1しか見えない程沈みかけている。空を見れば、紺色の空が次第に彩られ、せつかな星が輝いている。

「いい加減に、諦めてくれない？」

「だーれーがだ！」

お互いに息を切らしながらも、未だに追いかけてこは終結に向かおう気配もなく。

一步も譲れない距離を保ちつつある。

「誰が幕を下ろすべきか」

「貴族のお坊ちゃまのお前だろ？ 見聞を広めるためなのか知らないが、護衛もつけずにフラフラ出歩いて良い身分だね」

「誰か、貴族だと言った？」

「貴族じゃないの？」

「貴族じゃない」

何時間にも渡る追いかけてこの戦いで、お互いに走りながら皮肉を言い合う仲へと進展している。

「なーんだ、貴族かと思っていたのにー」

羅愛が残念そうに言った。

「貴族だったら、どうするんだよ」

首をかしげて、考えた。

（相手が貴族だったら……？ どうしようねえ。あっ！）

「愛人になる？」

「つぶ」

「ちよ、そこ笑うところかー！！」

相手にも選ぶ権利というものがあるが、この辺の出身の女全員に聞けば、皆が大抵このように答えるだろう。

ようは、貧乏人は玉の輿を夢見る。

「お前みたいな餓鬼が、何を言い出すと思ったら」

「アンタだって、アタシと同じ年代でしょう」

「お前がそのセリフ言うには、5年早いんじゃないのか？」

「そのセリフそのままお返しするわ、アンタの性格じゃ愛人になりたいとは思わないんだよ！」

そう叫んで、180度急転回して少年に飛び蹴りを喰らわそうとした。

だが、少年は悠々と飛び蹴りをかわし、その蹴り上げた足を掴んで羅愛を地面へと倒した。

「ドクワツ……っう」

顔面から地面へと倒れそうになったので、咄嗟に腕をガードした。

（くそっ、コイツ武術もできるの！？）

「咄嗟に顔をガードするなんて、一応女の子なんだ？」

「なんだと思っていたのよ、離せ、この」

「サルみたいに飛び跳ねるから、サルかと思っていた」

「はあー？ 人を馬鹿にして、お前なんか勝手にうるちよろして人攫いに出会えばいいのだ！ こんなやつなんて」

「サルがよく喚くな」

「喚きたくなるわよ、この変態！ どこ触っているのよ」

「ん？ 愛人の意味を知っているのか？ と思って」

「ちよ……」

少年は羅愛の背中に膝で押さえつけ、全体重をかけている。見た目よりも重たく、羅愛の力では逃れられない。片手を後ろに捻り上げられて押さえられ、少年のもう片方の手は羅愛の首筋を軽くなぞる。

「くすぐったいって、くすぐりの刑なのか？」

「俺の財布どこだ？」

「さあ、どこでしょう？」

少年の片手は羅愛の身体中をなぞっていく。

「やだ、くすぐったいって、うひゃ」

「言えば楽になる」

「絶対にいや、これは今日の稼ぎですから！」

少年は深いため息をついた。

「強情な奴だな、お前の家は貧乏なのか？」

「そーだよ、稼ぎがなければ殴られるんだからね！それに、病弱な妹がいるんだよ。その妹の分まで、稼がなければならぬんだから」

羅愛は必死だった。

子供は親のために働かせられる地域で、稼ぎがない子供は親に売られる宿命になっている。

それに羅愛には、事情があった。

親の作った借金を返済する義務が、羅愛に課せられていたからだ。病弱な妹を抱え高額な借金を返済するためには、どんな手段も選んでいられなかった。だから、金持ちそうな相手を狙った。が、こ

の
様
だ
っ
た。

嫌な仕事

夕暮れと共に開店する店は、タバコと酒そして安香水の匂いが交じり合う、そんな匂いがきつく鼻腔をくすぐる。

店内のカウンター内部は、どれもお子様向けではない飲み物の瓶がところ狭しと並んでおり、ひよろ長い細身の頼りなさそうな顔をした男が、グラスを拭いている。

そんな大人のお店である店内に、なんと場違いながら子供が二人座って喧嘩をしているではないか。

「こんな所までついてきてなんなの？ あんたストーカーなわけ？」

羅愛は向かい側に座っている少年を見て、不愉快でならなかった。

「お前がどんな悪さをしているか、見てみたいだけだ」

ユタカと名乗ったこの辺では珍しい美少年は、あれからずっと羅愛の後をつけまわしている。

先ほどの鬼ごっこは、羅愛が負け。

負けを潔く認め、ユタカの物を返した。

なんとユタカは、羅愛との決闘代と称して、金貨3枚を彼女に渡したのだ。

「お駄賃やっただろ？ 観察代も含まれている」

「なにそれ！ ストーカー代なの？ どおりでいっぱいもらったわけだよ」

裸電球の光が頼りなさげに揺れ、お店の蝶番が壊れて斜めに傾き半分腐っている木造扉から、本当の客が入ってきた。

「いらつしゃいませ、カナン様」

「マスターお元気？ お久しぶりですわ。あら、羅愛くんばんは」

闇夜の色を髪の毛に宿し、紅石の色を両瞳に閉じ込めた女が微笑んで羅愛を見た。エキゾチックな不思議な雰囲気が漂う女で、闇色の髪色に肌が浅黒い中に紅石の色が二つ浮かんでいる様は、物語に出てくる夜の女妖精みたいに神秘的だ。

彼女は長いストレートの髪を邪魔くさそうに払って、カウンター席に座った。

「お久しぶり、カナンさん！ 最近はどうしていたの？」

羅愛は満面の笑みでカナンに近寄った。

「ちょっと身体を壊していたのよ、お仕事がんばりすぎちゃったみたいね。ところで、あの子は羅愛のボーイフレンドかいしら？」

茶化すように笑うカナンに、羅愛は鬼の形相を浮かべて全否定した。

「違いますっ！ あんな奴なんか、大嫌い！ あれは、ストーカーという馬鹿な人間の一人ですから」

「あら、そうなの？ でも、私には見えるわ」

「え…」

「貴方の運」

「それ以上は駄目ええええ ！！ 聞きたくないわ」

羅愛は声を上げて、耳をふさいで騒ぎ出したので、ユタカが皿を羅愛の方へと全力で投げた。

「うるさいぞ、猿女」

ナイスキャッチで受け止め、ユタカに全力をもって皿を投げ返す。

「誰が、猿じゃ！ このストーカー男！」

また、投げる。受け止めて、投げる。また、投げる……の繰り返しで決着がつかない勝負が始まった。

「まあまあ、仲がいいこと」

二人の勝負をカウンターに座って楽しそうに眺めるカナンに、無口そうなマスターはお酒を出した。

「あら、ありがとうマスター。ところで、調子はどうかしら？」

カナンがグラスを取って、一口酒を口に含んだ。

「カナンの占い師の腕と、羅愛の賭博の腕があれば、この店は繁盛さ」

「今日はあの二人が賑やかだけど、他に客はいないのね」

そっぴいながら横目で羅愛とユタカの二人を見ると、まだ皿の投げ合いをしていた。

「あんた、知らないのかい？ 2日前から王が視察にこの地区に来ているために、夜間は見回りが強化されたのさ」

「そっだったの？ ここ最近寝込んでいたから、知らなかったわ」

マスターはグラスを拭き終わり、手を叩った。

「おい、店の皿で遊ぶな！」

マスターの注意に羅愛は手を休める気もなく、それどころかマスターの注意に抗議する。

「だって、コイツが辞めないんだもん」

「お前が、手を止めればいい話だろ？」

「だーれか、止めるか！ 止めるのはお前だ」

「そうか、簡単なことすらできないとは……。やはり、猿だな」
「な〜に〜おう」

ブチッ

二人が皿を投げつつ言い争っている時、何かが切れた音がした。

二人が何事か？ とゆっくり音がする方を向くと

「二人共、いい加減にしなさい。ね？」

カナンが観音様のような穏やかな笑みを浮かべながらも、凍て付くオーラを二人に発しているではないか。

それにより、羅愛は皿を投げようとした腕が止まり、ユタカは目を見開いて固まる事となったのである。

「さあ、いい子だから仲良く遊んでなさいね」

完璧に子供扱いされ、羅愛はふてくする。

「子供じゃないし、アタシは立派に働いているんだから大人よ」

「働いている方法がまともじゃないけどな」

「世間知らずは黙ってな。アンタみたいなボンボンに何がわかるんだい。このような地区は金を得るなら手段を選べないんだよ」

住んでいる地区が国の中では貧困に苦しんでいるため、地区の間は基本的な生活水準がとても低い。

羅愛は世間が広いことはわかっていた。

だから、この地区よりマシな生活が出来る場所がいくつかあるのも知っている。

その地区の人間からしたら、この人間達はまともじゃないと、みなされるのだろう。

目の前にいるコイツもその一人で、マシな生活を送れる環境ですくすく育った一員にすぎない。だから、綺麗事ばかりぬかす。

スリがまともな金稼ぎだとは思ってないが、選択種が少ないのでしょうがなくやってるだけ。人それぞれ事情があるのに、何も知らない人間に難癖つけられるのは腹が立つ。

「今日の夜はここでは稼げないらしいね。マスター悪いけど、アタシは帰るよ」

「悪いね。ここ数日はこの調子かもしれないな」

「そうだね。王様が城に帰るまでは続くかも」

羅愛は立ち上がり、店を出ようとした。

そのとき、ふっと振り向いてユタカに釘を刺した。

「スニーカーするなよ。宿ならここでも泊まらせてくれる。このマスターなら宿料金はばったくらない、今晚はここにしな」

「羅愛」

「何だ？」

「夜更かしは禁物。子供は早く寝ないと背が伸びないぞ」

その言葉に、羅愛は腰につけていたポーチの中から短剣を取り出し、ユタカを殺すつもりで投げつけた。だが、その短剣は悠々《ゆうゆう》と受け止め、投げ返される。

投げ返された短剣をもちろん羅愛も悠々《ゆうゆう》と受け止めた。

カナンが睨んでいるので、これ以上攻撃はしなかった。しかし、もつと短剣を投げつけたい気分だった。

嫌な仕事（2）

静かな夜だった。

普段の夜ならば夜商売をしている者達数名くらいはすれ違うのだが、王が視察に来ているため行っている見回り強化の成果がこれなのだろうか。

夜外に出ているのは、怖いもの知らずな輩だけなのかもしれない。それとも、上手く見回り強化をかわす手段がある者か。そのどちらかだ。

羅愛は後半だった。

とあるところから取り寄せた見回りルート表をポケットから出し、今日の見回りルートを調べて頭に叩き込む。

「今日の稼ぎも少ないし、気が進まない嫌な仕事しないと」

身体を伸ばして、深呼吸をする。深い溜息をついて、歩き出す。

細心の注意を払いながら、気配を殺して町中を歩む。

「警戒するのも無理ないかな。ここの地区は、とても物騒だからね」

この町は貧しすぎるために、まともな生き方が出来ない奴らのたまり場だ。

無法地帯化になりつつある。

原因として、とある組織がこの町を牛耳っているからだっただ。

その組織は、最初は貴族から汚れ仕事を貰い受けていた団体だった。それが実力がついてき、大きな組織に変貌。それと共に、様々な悪い商売を始めたのだ。

一つに金貸し業を組織が運営しているが、その金貸し業は最悪なものだ。

金を借りたが最後、法外な利子がついて回ってくる。返せなければ、家族や子孫まで永遠にこの組織に追われる羽目になるのだ。

「しょうがない」

嘆いても悔やんでもそれが運命だ。

運命は受け入れるか、力を身につけて運命を跳ね返すかのどちらかしかない。

羅愛は運命を受け入れた方だった。

病気がちの妹もいるので、無理をしてまで運命を跳ね返そうとまで考えられなかったのだ。

「臆病といえば、臆病なのかもな」

自分の事を鼻で笑い、見えてきた建物を見上げた。

その建物は、教会だ。

羅愛は迷わず教会の中へ入り、奥へと進んで行く。

教会の奥にある十字架を見上げて眺めると、羅愛は心底皮肉めいた笑いが湧いて来る。

正義だの平和だのを喚き立てている宗教のクセに、ここの教会がしている事はその反対だ。

教壇を苦勞しながら動かすと、教壇が置かれていた床下に扉が出てきた。その扉を開けると、地下へ降るための階段が現れる。

羅愛は導かれるままに階段を降る。

階段を降った先は、細い通路だ。その細い通路を暫く歩くと、明るい空間に出た。その空間は、ホールだ。

円形の空間の壁に4つの扉がついており、羅愛は4つの扉の1つに手を掛けて躊躇わず勢いよく開く。

「ふんっ」

中の状況を一瞥し、輕蔑の意を込めて鼻で笑ってやる。

「こんな時でも、阿片を吸う神経がわからん」

扉の中は、広く薄暗い部屋だった。

部屋には幾つか寝椅子があり、その上でくつろいで阿片を吸っている客達が薄暗い部屋の中を蠢うごめいている。

ここは阿片ばかりではなく、薬なら何でも好みに合わせて調合して売る店だ。

ただ、この主が阿片が好みで阿片を中心に売っているから、阿片窟くみたいな感じになっている。

「お子様には、まだ早すぎるからな」

声をかけられ、羅愛は自然と身構えた。

「ゴツダ。アンタは勇氣あるよね。王様がこの地区を視察している最中でも、非合法なことを休もうとはしないんだからさ」

ゴツダと呼ばれた20代後半の男は、嫌な笑みを浮かべて羅愛の数メートル先で座って羅愛を観察していた。

神父服を完璧に着こなしているところを見ると神父なのであろう。だが、ガタイが良くて目つきが鷹のように鋭い男は神父服が不釣合いだ。しかも、男の表情と雰囲気きふきが更に不釣合ふてあいさを増す。

「お前にはいつも言っているだろう？ 世の中は金だと。王が視察する最中でも金を稼がなければいけないのだ」

神父にあるまじき発言。

この男は、神父に変装したヤクザ、というのがぴったりだ。

「あっそう。どーでもいいよ、そんなの。アタシが稼いでもアンタに稼ぎは吸い取られているんだからさ」

「俺を恨むより、どうしようもない親を恨む事だな」

殴りたい衝動に駆られた。

誰のせいだ！ と、罵りながら思いつきり殴りたかった。

法外な利子を取り、この地区のお偉いさんと癒着して美味しい汁を吸っている奴に言われたくない。

「何か仕事はないかい？」

羅愛は、拳を握って殴りたい衝動を何とか押さえる。

「俺に仕事を求めてくるのは珍しいな。今晚はそんなに酷いものか？」

「酷いも何も、一般人はいい子におねんねしているよ。出歩いているのは、ここに集まっているようなどうしようもない奴らだね」

ゴッダは、やれやれといった表情をし肩を竦める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7962q/>

剣の記憶外伝 - 出会いは最悪 -

2011年3月30日23時23分発行